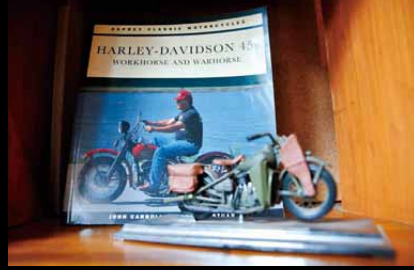




愛車のSVはGモデルだから、もとはサイドカーだったのだから。「高速道路を使って短時間で長い距離走るよりも、下道をゆっくと時間をかけて走る方が性に合っている」。バイク用品は「いつでもすぐに出かけられるように」玄関のそばに置いている。が、バッグもブーツも「メンテ？ 使いっぱなしで放ったらかしですね」と笑っていた。



ウォレットもチェーンも、ごつトップのネックレスもプレスレットも新日含めて自作のもの。唯一、バックルだけは今から20年近く前に現ファーストアローズの伊藤氏に作ってもらった杉中氏の宝物。ベルトのコンチョは最初に見よう見まねでやってみた銀細工。「口づけの加減がわからなくて2個溶かしちゃった」



「いやあオレなんてねえ、本当にいい加減な人間なんです。エヘヘ」
こんなことを開口一番にボソッと言う人間なのだ。そして照れ笑いでも自嘲でもない、目の前にいる人の心の内側にサラリと滑り込む不思議な笑み。文字だけを追うとあまりに不用心すぎる印象だけを残す。まあ、事実にこの男は用心という点には恐ろしく無頓着だ。こんな書き方もないが、それが許されるというのがこの男の「徳」なのだと思う。
「まずハーレーだったんですよ。物作り、銀細工、それよりもまずハーレーだったんです」
時は90年代中期、兄弟誌ハイブスがハイカーたちに広く認知され始めた頃。「当時住んでいたアパートに停められるのはスポーツスターだろう」と思ってたハーレー屋さんを訪ね

たところ、「店の隅に置いてあったホロホロのハーレーに一目惚れ」したという。店の前に、それはショヘルヘッドという前時代のエンジンで、80年代初頭のスタージスというモデルであることを教わった。
「ハーレーのことは、ハーレーダビッドソンという社名しか知らなかったんです。とにかくハーレーに乗りたくて、ハーレーだったらなんでも良かったんですから」
この言葉どおりの激しい物欲は、その後のトラブル（主たる原因は彼のメンテナンス不足だと推測のまま断言してもいい）をものともせず乗り越え、仲間たちとのキャンプやミーティングなどショベルとの蜜月期を過ごした。さて本職である物作りについて。

「やりたいこともなく、なんとなく会社務めをやってましたね。なんとなく務めてましたから、なんとなく辞めちゃったわけですよ。それでしばらくフラフラと……」
そのうちに「なんとなく波長の合う」バイクと知り合い、その中からひとり、またひとりとして独立して洋服屋やバイク屋や飲み屋などを始める仲間のことを見ながら、「こういう生き方もあるのか」と思ったのだという。インディアン系のジュエリーが好きで見よう見まねで銀細工をしていた彼にとって、銀細工で食べていくことに距離感をとなかった。「昔からカズヤ（ファーストアローズの伊藤氏）を知ってたせいかな、オレにはあんな技術なんてないし無理だろう」と思ってたんですけどね。無理と思っ以上に、いつの間にか物作りそのものが好きになってたんですよ」

杉中直人

41歳。杉中工房代表。銀細工師。千葉県出身・東京都在住。'58年式G所有。我流で覚えたため随分な過まわりをしたが、「それもまた経験」と超プラス思考で物作りを進めるのが彼の真骨頂。最近ではブログを書くようになった。また、細かな作業は老眼が必要になってしまった。<http://suginaka-kobo.com>



「やりたいこともなく、なんとなく会社務めをやってましたね。なんとなく務めてましたから、なんとなく辞めちゃったわけですよ。それでフラフラ……オレなんて本当にいい加減な人間なんですから」